熊本学園大学 外国語学部 第02号
英米学科 GAZETTE

平成28年10月
発行・編集
熊本学園大学　外国語学部

巻頭言

文学部と外国語学部の違い

外国語学部長　矢野　謙一

進学説明会で説明しながら、文学部と外国語学部の違いが明確に認識されていないように感じる。この二つの学部の教育は全く異なる。違いを一言で言うと、文学部は外国語文献を読むための外国語を教育し、外国語学部は人を相手に使う外国語を教育する点である。

文学部は日本文学や英文学などの専攻だけでなく、哲学、歴史学などもある。そこでの外国語教育はそれらの研究に不可欠な文献を読みのためのものである。文学部で日本文学、英文学などと分けるのは、作品が書かれた言語の違いによるものである。英文学では作品の解釈に必要な英語を主とし、読みのための英語が重視される。

わが外国語学部には英米学科と東アジア学科があるが、これは言語が異なるため分けたというより、語学の訓練の方法と過程が異なるためである。英米学科は基本的に4年間の学部教育でできるだけ語学力を完成に近づけるカリキュラムを編成している。また英語圏に留学にゆける条件を整え、留学サポート制度を活用しながら、現場へ送り出すようにしている。東アジア学科は1，2年で調音法や文法や翻訳、会話など基礎を徹底して教え、熊本が台湾、韓国、中国の近くにあるので、旅行や短期の滞在を勧め、現場である程度の運用力を身につけると、さらに高度な知識を授けるようにしている。両学科とも人を相手に使う外国語の教育がカリキュラムの前提となっており、文学部の教育とは大きく異なる。

英米学科の最新ニュース

9月初旬にカナダのヴィクトリア大学に10名の学生が、長期海外研修・インターンシップに出かけた。また、米国・イギリス・カナダの協定大学に4名の学生が、10カ月の留学に出かけた。

研究紹介

ヴァージニア・ウルフの小説研究――ヴィジョンと表現

外国語学部英米学科教授　吉田　良夫

ヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf）は、1882年1月25日、ロンドンのハイド・パーク・ゲート22番地に生まれた。日本では明治15年、維新の後、明治政府がようやくその一歩を踏み出した頃であり、英国では隆盛を誇ったヴィクトリア朝もあますところ19年、世紀末というには多少時機尚早の頃である。

ウルフの作家としての原点を決定づけたものは、幼い頃の強烈な神秘的体験であった。たとえば、作家は死後出版された『存在の瞬間』（*Moments of Being*, 1976）のなかで、幼い頃の強烈な「啓示」の「瞬間」を数例挙げて、それを「存在の瞬間」と呼んでいる。一つだけ例示すれば、幼いヴァージニアは、ある日「玄関のドアのそばの花壇を見て」いて、「あれが統一なのだ」と突然悟ったことがあったという。それは彼女の生涯を決定づけるような強烈な「啓示」の瞬間であり、普段現象の背後に隠れて見えないリアリティを垣間見た「ヴィジョン」の瞬間であった。作家はこれに類する衝撃的「経験」を幾つか語り、それを「存在の瞬間」と呼んでいる。「存在の瞬間」こそ、ウルフ文学の根幹を成すものであり、彼女の作家的努力とはこのような「ヴィジョン」の瞬間を生涯にわたって追求し、それに表現を与えようとしたことにあった。

処女作『船出』（*Voyage Out*, 1915）と『夜と昼』（*Night and Day*, 1919）の二篇の伝統的手法による長篇発表の後、実験小説『ジェイコブの部屋』（*Jacob's Room*, 1922）の創作により、ウルフは〈変貌〉を遂げ、新生の作家として蘇生する。『ジェイコブの部屋』における文体の革新は、自己の起源にある感性へ遡行し、それに「表現」を与えようとする作家的営為に他ならなかったのである。

その後作家は、革新的な手法による『ダロウェイ夫人』（*Mrs. Dalloway*, 1925）『燈台へ』（*To the Lighthouse*, 1927）『波』（*The Waves*, 1931）などを次々と出版し、実験小説家としての傾斜を深めてゆく。『波』はウルフの実験小説の極北の形を示すもので、伝統的な小説作法における通常の意味でのプロット・性格描写・会話などはなく、時間の推移を象徴する太陽の運行と生命のリズムを象徴する波の律動を描くト書きの部分に六人の登場人の独白が続くという構成の難解な作品である。ウルフ的「ヴィジョン」（＝内面）の「表現」（＝独白）の方法論を極限まで突き詰めた作品と言える。

※幸いこの一連の研究は『ヴァージニア・ウルフ論――ヴィジョンと表現』（葦書房、1991年）、『ヴァージニア・ウルフ論――ヴィジョンと表現　改訂版』（葦書房、1999年）として出版することができたことを付記しておきます。

学者への道程

外国語学部英米学科准教授　松島　綾

高校１年生の３学期から一年間 AFS でニュージーランドに留学したのがきっかけでした。現地でのカルチャー・ショックはなかったものの、日本に帰国してからは数ヶ月の間カルチャー・ショックに悩まされ、留学前には何の疑問も持たなかった高校生活や日本の慣習に対し「どうして？」「なぜそうしなければならないの？」といった思いに押しつぶされそうな日々を過ごしました。家族を初め、高校の先生や同級生に尋ねても「そうだから。どうしてそんなこと聞くの？」という答えしか得られず、「日本人であるということはどういうことなのか」という疑問を持つようになりました。

このことがきっかけで「異文化コミュニケーション」が学べる大学へ進学を決め、その後日本での修士課程修了後、アメリカの大学院へ進学しました。アメリカでも当初は異文化コミュニケーション学で屈指の大学で修学しましたが、日本文化をアメリカ文化との比較のみにて語る手法や画一的な文化の語り方に違和感を覚え、レトリックというコミュニケーション学の分野へ転向、そこでメディアやポップ・カルチャーが形成する日本人像を考察する現研究がスタートしました。

レトリックは日本語で「修辞学」と訳され、雄弁術や演説法を研究する分野としてよく知られていますが、現在のレトリック研究はそれのみではなく映像研究やポップ・カルチャー研究に至るまで、様々な文化領域を研究対象としています。研究方法も多岐にわたり、アリストテレスやプラトンなどの古代ギリシアの哲学者の思想を用いたものから、現代哲学の思想や心理学を用いたものまであります。

私はその中でもビジュアル・レトリックという分野を中心に研究しています。日本のメディアやポップ・カルチャーを分析し、どのような日本人像が表現されているのかを考察しています。最近では「マンガ嫌韓流！」に現れる日本人像を考察しました。また、アメリカなどの海外で紹介される日本文化を分析し、それらがどのような「日本人像」を形成しているのかも研究しています。

図書紹介

“World Englishes” の参考図書

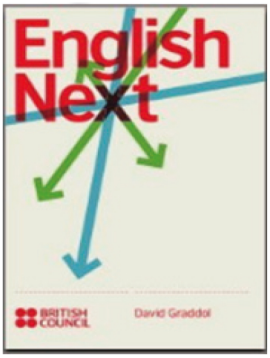
外国語学部英米学科教授　米岡　ジュリ

“World Englishes” is a relatively new field of research based on the premise that English is “owned” not by a specific country or group of speakers but by everyone who uses it. To understand the background behind this field, I recommend two highly readable online books written by David Graddol and sponsored by the British Council. Both are freely available for download via internet:

(1) The Future of English: a guide to forecasting the popularity of English in the 21st century (1997)

(2) English Next: why Global English may mean the end of “English as a foreign language” (2006)

Both books contain a wealth of facts and illustrations about the importance of English as a world linguafranca. The first surveys a number of economic and social factors, including the spread of the internet and global culture, and asks whether English will still be the dominant language in 50 years. The second focuses on the need to learn foreign languages, as multilingual speakers of international English are more desirable in a global market than monolingual speakers of “native” English.



学会・調査報告

外国語学部英米学科教授
Joseph Tomei

My IATEFL2016 presentation concerned how metaphors help students with writing. When students organize essays around a metaphor like *Life is a journey*, they are able to expand the depth of their vocabulary with more coherence and continuity. The conference was international, with over 2,500 ELT professionals from over 100 countries and was held from April 13th-16th, when the earthquakes struck Kumamoto. Many, noticing that I was from Kumamoto, asked about the situation, reminding me how small our world is.

外国語学部英米学科教授
神本　忠光

8月にフィンランドで開かれたEuroSLAで、L2学習者の興味等を測る際に使うLikert尺度について発表した。通常「まったくない」と「大変ある」を両端にした複数の目盛り形式から選ばせ、分析は数値（間隔尺度）に置き換えるが主流である。研究では、同じ質問項目に対して目盛りのことば版と数字版を作成し、データ収集し比較した。その結果、両版は必ずしも同等ではないことが明らかになった。

編集後記

リオデジャネイロ五輪・パラリンピックが閉会した。さまざまな種目で競技後、多くの選手がコーチと抱き合い、嬉し涙や悔し涙を流した。コーチという呼び名はもっぱら運動の指導者を指すが、指導という意味では英語教師との共通点もある。モノと名称の関係は基本的には恣意的ではあるが、英語教師をコーチと呼ぶようにしたら、もっと成果がでるかも知れないと夢想する。Gazette 第２号も無事に発行できた。執筆者に深謝。(TK)

編集人　神本　忠光（英米学科長）

〒862-8680
熊本市中央区大江 2-5-1
TEL: 096-364-5161（代表）
Mail: kamimoto@kumagaku.ac.jp

きみと未来をつなげる
クマガク